

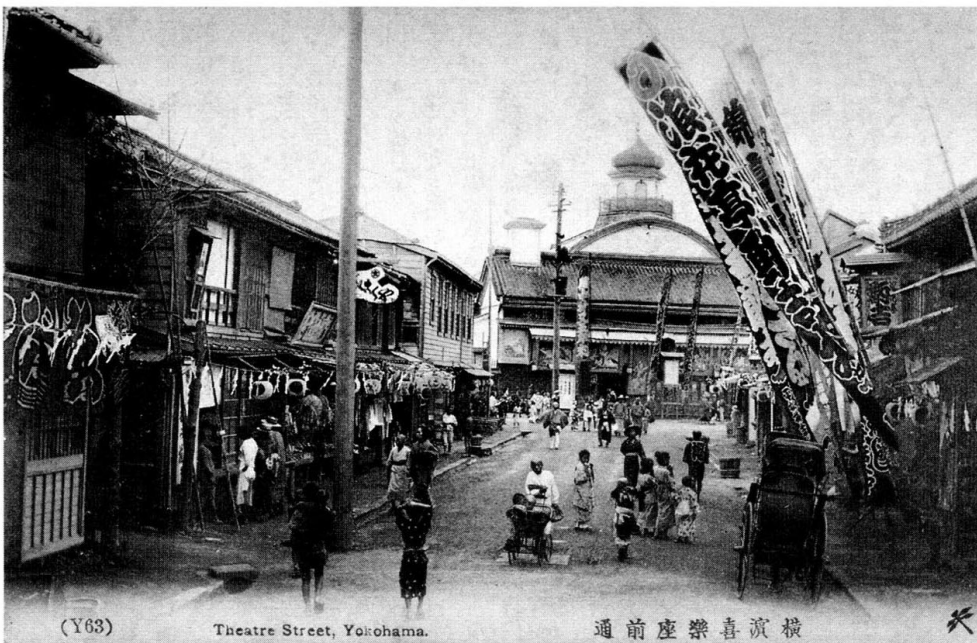
NEWS

開港のひろば

Number
71

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話(045)201-2100
ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

発行 日／平成13年 1月31日(水)
印刷／中川印刷株式会社



販町喜楽座前 トンボヤ作製絵葉書

追憶の横浜

絵葉書にみる100年前の人びとと風景

企画展



トンボヤ作製絵葉書より

版合資会社、星野屋、トンボヤなどがあげられます。上田写真版合資会社は、「日本元祖絵葉書製造元」を自認する上田義三がはじめました。星のマークの星野屋は、吉岡長次郎が東京の絵葉書を横浜で転売したところ、面白くように売れたため、自ら商売を興したものです。トンボのマークのトンボヤは、吉村清が経営し、伊勢佐木町に店舗を構え、多くの美しい絵葉書を残しました。

庶民の通信手段あるいは趣味の対象として普及した絵葉書は、安価で大量につくられ、多くが収集家の手で伝えられてきました。そうした一枚一枚には、当時の風景や人びとの暮らしの様子が克明に写しとられ、現在では貴重な歴史資料となっています。横浜の街角をとらえた絵葉書に目を凝らせば、そこに写っている橋、走っている市電の線路、建築中の建物、電信柱の張り紙などから、その風景がいつ頃のものかを判断できそうです。またそうしたモノばかりでなく、

伊勢佐木町の劇場街を樂しげに行きかう人びと、天秤棒で野菜をはこぶ男性、横浜公園で子守りをする少女の姿から、当時の人びとの風俗や生活がうかがうことができます。今回の企画展は一九〇〇年代から三〇年代半ばまでの絵葉書で構成されました。二一世紀は始まったばかり。ここでしばらく、絵葉書という小さな長方形の紙片に記憶された、二〇世紀はじめの横浜にタイムスリップしてみませんか。

そのころ横浜で絵葉書作製に携わっていた人物・会社として、上田写真

切れたのです。傷者・卒倒者がでる騒ぎの中で売り切れたのです。そのころ横浜で絵葉書作製に携わっていた人物・会社として、上田写真

(伊藤泉美)

絵葉書を読む

「追憶の横浜」展出陳資料から



図1 開港50年祭の亀善店頭

横浜開港資料館では、横浜の風景絵葉書を中心に、約二万枚の絵葉書を所蔵している。今回の企画展ではそのうち約二〇〇点を展示するが、ここでそのいくつかを紹介したい。

とまや 苦屋の煙

一九〇九年七月一日、横浜開港五〇年を祝う祭りが盛大にとり行われた。その年は横浜が開港された安政六年、一八五九年から数えて五〇年目にあたった。横浜税関新埋立地、つまり新港埠頭を会場として、時の桂太郎首相、各国大公使、横浜の各界の代表者が出席して記念祝典が挙行された。市内各所も提灯やアーチで飾られ、山車や仮装行列で賑わった。その様子は市内の絵葉書屋や横浜商業会議所などが発行した多くの記念絵葉書に残されている。

図1は弁天通り三丁目、生糸貿易商の亀善こと原合名会社の店頭を写したトンボヤの絵葉書である。亀善の店先には、開港当時の横浜を描いた油絵の大額がかかかれている。印刷が薄くてやや見えにくいですが、そこには「昔思えば苦屋の煙、ちらりほらりと立てりしところ」と、開港五〇年祭を記念してつくられた、森鷗外作詞の市歌に歌われた横浜村が描かれている。

亀善を興した原善三郎は、開港当初横浜に出て、以来、大生糸商に成長し、初代横浜市会議長をつとめた。「横浜は善きも悪しきも亀善の腹一つにて事決まるなり」と詠まれた狂歌は有名である。善三郎自身は開港五〇年を待たずに没し、三溪園をつくった二代目原富太郎の時代となっていた。しかしこの絵葉書からは、横浜の発展と人生の浮沈をともにした、亀善が初期の横浜商人の心意気が伝わってくるようだ。またこの絵葉書を眺めることは、その時から五〇年前の光景とそれを見つめる人々を、その時から一〇〇年あまり後の私たちが見つめるという構図になる。歴史の時空をつなげる不思議な絵葉書である。

明治の横浜、清朝の中国

絵葉書が普及した頃には、横浜の外国人居留地はなくなっていたが、山手や山下町あたりには、多くの外国人が生活していた。その六割ほどが中国人であり、図2の絵葉書が

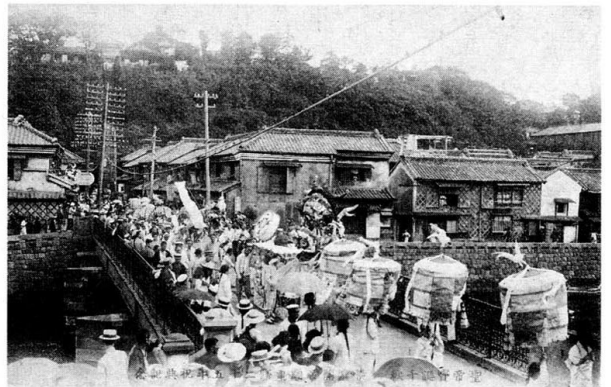


図2 関帝廟改修25周年記念絵葉書

現在は函館・神戸・大阪の関帝廟では前者を、横浜では後者を関帝誕としてまつている。

関帝廟改修記念絵葉書はトンボヤから出され、今のところ絵柄の違う四枚が確認されている。図2は龍舞の行列が前田橋を渡るところで、後方には元町百段の階段がみえ、行列や見物客の中には大勢の弁髪姿の中国人が写っている。弁髪はもともと中国北方民族の髪型だが、清朝時代の男性の髪型であった。一九一〇年といえば清朝崩壊の前年、わずかに四歳のラスト・エンペラー、宣統帝溥儀の時代である。数ある記念絵葉書の中でもこのシリーズは、明治の横浜と清朝の中国を生きた、横浜華僑の風俗を伝える貴重な資料といえる。

失われた川と橋

絵葉書が教えてくれる面白さの一つは、何と言っても、現在は失われた景観をその中にとどめていることだろう。図3の絵葉書は花園橋付近から眺めた派大岡川と横浜市役所付近の情景である。とは言うものの、今は花園橋も派大岡川もない。かつての横浜の中心部には川が縦横にながれ、いくつもの橋がかかっていた。図3の中央やや左上に見える橋は、港橋、その向こうには豊国橋、吉田橋とつづく。さらに桜木町方面に直進して柳橋を越えて桜川に入れば、錦橋、緑橋、瓦斯橋、紅葉橋、雪見橋、花咲橋とつづいた。桜川は埋められ、紅葉橋は陸橋となり、雪見橋、



図3 派大岡川と市役所付近

花咲橋はバス停にその名をとどめて
いる。

川の右手にたつレンガ作りの建物
ある。現在と同じ港町一丁目にそび
えていた。この庁舎は二代目で、一
九〇八年七月に起工し、満三年の歳
月と工費四〇万円あまりをかけて完
成した、地下一階、地上三階だての
ルネサンス様式の庁舎であった。レ
ンガと白石を重ね、水平線を強調し
た華麗な姿は市民に愛され、多くの
絵葉書にその雄姿が残されている。

しかし、一九二三年九月、関東大

震災で焼失
する。堅牢

な建物自体
は倒壊をま
ぬがれたが、
屋上の化粧
塔から火が
入り、内部
が全焼する。
そして震災
復興整備の
一環として、
惜しくも爆
破されたの
である。

市役所の
前を流れる
派大岡川は、
時代がくだ
り、昭和四
〇年代以降
の市中心部

再開設計画の中で埋め立てられ、あ
たりの景観は一変した。しかし失わ
れた風景は、こうして絵葉書の中に
記憶されている。

復興途上

震災以後の一枚を紹介する。図4
は横浜市商工奨励館発行絵葉書の上
半分の写真である。ちなみに下半分
は横浜公園とその周辺である。この
写真は太田橋入口付近を中心に、震
災復興が進む港の情景をよくとらえ
ている。中央の三階だての大きな建
物は昭和四年（一九二九）竣工の横
濱貿易会館である。このビルは現存
し、レストランや事務所として現役
を保っている。このビルの奥が大棧
橋で、新しいターミナルが完成し、
大型船舶が両岸に着岸している。棧
橋右手の港内にはうっすらと白灯台
と東水堤が見える。棧橋の入口に視
線を戻せば、入口右手前の二階だ
ての建物は税関港務部、その後ろが
水上警察署である。

税関港務部の右手に、鉄骨の塔が
見えるだろうか。これは報時信号柱
である。報時信号柱は毎日正午に塔
の上の球を落下させ、標準時刻を知
らせたものである。この写真では球
が落ちているので、撮影時刻は正午
から日没までの間と知れる。

震災以前の絵葉書では、バンドの
中ほど、フランス波止場にたつ報時
信号柱が認められるが、震災以後の
姿は珍しく、この位置に移ったこと
が確認できる。そのわけもこの写真

の中からうかがえる。右端に樹木
が繁る一角が目に入るが、これは
整備中の山下公園である。報時信
号柱のあったフランス波止場は震
災の瓦礫を使用した山下公園の一
部となり、埋め立てられたのであ
る。

さて、写真左手前の空き地に
注目されたい。洗濯物が干されて
いたりするが、こは現在の横浜
開港資料館の所在地である。当時
は英国総領事館の敷地で、震災で
以前の建物が倒壊したため、更地
になっている状況である。写真中
央の木造平屋の建物が立つあたり
は現在の開港広場である。

英国総領事館、現横浜開港資料
館旧館は昭和六年（一九三一）に
竣工する。この絵葉書は昭和四年
四月の横浜市商工奨励館のオーブ
ンを記念して出されたものである。
また同年竣工の横浜貿易会館がお
さまっていることから、この年
の撮影とわかる。昨二〇〇〇年一
一月、横浜開港資料館旧館は横浜
市指定文化財となったが、この絵
葉書は総領事館着工以前の情景を
とどめる貴重な一枚である。

一枚の絵葉書は私たちに様々な
ことを伝えようとしている。絵葉
書から何を読みとり、それをどの
ように歴史資料として活用してい
くかは、今後掘り下げていくべき
課題であろう。

（伊藤泉美）



図4 復興期の太田橋入口付近

「歴史を集めつむぐ人びと」 記念講演会開催

先の企画展示「歴史を集めつむぐ人びと」の関連行事として、昨年十一月十八日（土）十三時三十分より、横浜開港資料館講堂において記念講演会が開かれた。参加者は約七十名で、ほぼ満席であった。

第一部 記念講演

「横浜市史」編さんの頃

講演会の第一部は海野福寿・明治大学教授が「『横浜市史』編さんの頃」と題して記念講演を行った。氏は、横浜市史編集委員の古島敏夫氏の薫陶を受けられ、昭和二九（一九五四）年に開始された「横浜市史」に調査員として参加、第一巻の鶴見川・大岡川の治水・利水を皮切りに、第三巻の生糸・茶貿易、第四巻の「商権回復」運動などを執筆された。

講演は、まず海野氏が御自分の『横浜市史』の業績を、「消しゴムがあったら消したいくらい」と前置きをされた上で、編集委員長・石井孝氏をはじめとする編纂関係者の回想から始められた。石井氏のユニークな人柄、「反骨」の生き方、地方史と日本史との有機的連関を強調する歴史観などについての回顧談から、当時の資料調査・編集会議の雰囲気や垣間見ることができた。また石井氏が発足当初に掲げた「基本方針」が、一貫して最終巻まで忠実に継承されたことなどを述べられた。

さらに話題は、海野氏御自身の当時の問題意識と研究課題に及んだ。

戦後の農村共同体の残存・対米従属という時代状況や、戦前・戦後の講座派理論の系譜などから、横浜聯合生糸荷預所事件をはじめとする、横浜生糸売込商や流通過程の研究を開始されるに至った体験を述べられた。なかでも「革命としての市史」というフレーズに、会場がどっと沸く場面もあった。



第二部 シンポジウム

「首都圏における歴史編纂の歩み」

講演会第二部は、首都圏形成史研究会との共催シンポジウムである。この企画は以下のような経緯で計画されたものである。企画展示の準備を進める過程で、主任の堀田璋左右をはじめ『横浜市史稿』の編纂関係者の多くが、名古屋市・群馬県など複数の自治体史編纂にかかわっており、周辺の自治体史編纂状況を看過することはできない、ということが次第に分かってきた。そこで昨年七

月以来、首都圏形成史研究会の協力を得て、首都圏各都県の歴史編纂の事情に精通しておられる方々にお願いで、九月と十月の二回、事前検討会議を重ねてシンポジウムを開催するに至ったものである。

当日のパネラーと報告題目は以下の通り。

松平康夫氏（東京都公文書館）

「東京都の修史事業の沿革」

手島仁氏（群馬県立吉井高等学校）

「群馬県史の編纂と堀田璋左右」

重田正夫氏（埼玉県立文書館）

「埼玉県史」の編纂と埼玉郷土会」

中村政弘氏（千葉県史料研究財団）

「千葉県史編纂さん」

明治三四（一九〇一）年以来、予算・人員等の面で困難な執行体制にありながらも、塚越芳太郎をはじめ先人たちの弛まぬ苦闘によって現在まで編纂が継続されている『東京市史稿』、関東大震災により事業が中断しながらも、再開を求める地元郷土史会や編纂主任堀田璋左右らの努力によって完成した『群馬県史』、柴田常恵・稲村坦三らの著名な研究者と調査を担当する史蹟名勝天然記念物調査委員、及び事業を全面的にバックアップする埼玉郷土会の三者によって編纂された『埼玉県史』、戦前期には行政の手による自治体史の伝統がない中で、知事・副知事・県議会の強力な推進力を得て戦後刊行された『千葉県史』、と、示唆に富む個別報告が続いた。

続いて首都圏形成史研究会を代表

して寺寄弘康氏（神奈川県立歴史博物館）が、編纂動機・主体・組織などの面で非常に多様な自治体史編纂の様相がうかがえること、また資料収集と自治体史編纂は理想的には両輪の輪として繰り返し行われるべきものであり、先人たちが直面した課題が極めて現代的な意味を持っていること、などについて問題提起を行った。これを受けてパネラーより、編纂の動機・主体についてコメントがあった。

その後フロアーから、自治体史編纂と「市民」との関係について問題提起があり、横浜市史編集委員長・高村直助氏（フェリス学院大学教授）から、工業化・都市化を柱とする現在の横浜市史の編集方針についてコメントを頂いた。また次世代に向けての自治体史のあり方（読者・媒体の変化に対応した工夫）について質問があり、松平氏・手島氏が、東京都公文書館・群馬県の極めて実践的な取り組みの事例を報告した。

参加者の皆様の興味関心と、当方の企画との間に十分な接点が見いだせたかどうか、やや疑問の余地が残るところである。しかしこれを新たな課題として、自治体史編纂をめぐる、編纂者間、あるいは「編纂者」と「読者」間で活発な議論を交わすための場を、今後積極的に創り出すことの重要性を痛感した。改めて海野氏、パネラー及び協力者の方々、参加者の皆様方に心からお礼を申し上げます。（松本洋幸）

「市民」育成と『横浜市史稿』

昨年十一月の記念講演会で、フロアーから自治体史編纂と「市民」との関係について質問を受けた。この問題への直接の回答にはなっていないが、大正・昭和期における横浜市の「市民」育成と市史編纂事業との関わりという観点から、若干の試論的考察を試みることにしたい。

ただし、はじめに断っておくが、ここで扱う「市民」という言葉は、単に「市の住民」という意味ではなく、むしろ「善良な市民」「市民像」「市民性」というような理念的な意味で使用している。この場合、「市民」とは、先天的に存在しているものではなく、新たに創出・改変されていくものとして想定している。

『市民読本』

横浜市は昭和四(一九二九)年十一月、『市民読本』なる小冊子(B5判・二六六頁)を発売している。開港から震災復興までの歴史・現況を綴った第一部「我れ等の横浜市」と、市民生活を行う上で必要な知識・道徳などを記した第二部「市民の修養」とから成る。編纂者は田沢義輔。日本青年館理事で、全国の青年団運動に尽力した元内務官僚である。

当時の市長・有吉忠一は、本書の刊行の目的について、市民に市の変遷と市政運用の理論と現状とを了知せしめ、市民の「愛市中心」を高めるため、と述べている。「愛市中心」を必要とする背景として、昭和二年の市域拡張により新市民が増加したこと、来るべき昭和五年に初の普通選挙による市議員選挙を控えていた

こと、などが考えられる。

『市民読本』で特に強調されているのは、震災復興完成後における工業化と内国貿易の拡大を柱とする「経済復興」の必要性である。同様の主張は、昭和四年五月の復興祝賀式での有吉の挨拶でも確認できる。では「経済復興」はいかにして可能か。そこで要求されるのが、「横浜魂」を持った「市民」の結果である。「横浜魂」とは、寒村からわずか七〇年にして近代的大都市を創り上げた「創造進歩の努力」、震災復興の「堅忍不拔の精神」、「大国民の襟度」の三者である。そして『市民読本』第一部はこうしめくくる。

この市民魂を仲介として我れ等は結合する。過去に於て然りしが如く将来に於ても同様でなければならぬ。

「経済復興」を支える「市民」を形成・統合する際に、開港後の都市建設、震災後の復興事業に尽力した先人の歴史が必要とされたのである。

またここで注意したいのは、このメッセージはとくに青年層に向けられたものであったという点である。『市民読本』の序文に曰く。

市民が真に我が市の実状を理解し、其の発展の爲めに一層奮励努力の念を強むると共に、第二の市民たる青少年か、本市の永遠の使命に向つて奮起せられんことを切望して止まざるなり

また有吉は昭和四年九月十七日開港記念会館で関内地区の青年団を相手に「横浜市を如何にして発展せしむべきか」という演説を行い、同様の

試みを市内十一カ所で行っている。

以上のように、震災復興を完成させた有吉市長は、更なる「経済復興」の必要性とそれを可能にする「市民」、なかでも青年団の育成を、重要な政策課題としていた。当時横浜市史編纂事業は、史料収集の成果を『開港七〇年記念 横浜史料』として出版し、本編の編集に取りかかろうとしていた時期であった。以下、昭和四年・五年の市史編纂係の「日誌」(横浜市史編集室蔵)の中から、有吉市長の「市民」育成の試みと符合するような活動を二つ紹介したい。

『市民読本』の校閲

昭和四年六月十一日に開かれた市民読本の編纂委員会に、当時横浜市史編纂主任で、後に『横浜市史稿』風俗編』を著す加山道之助が参加している。彼は同じく横浜市史編纂嘱託で「仏寺編」を担当する中山毎吉を伴い、前月の五月三十日、市民読本の件で教育課へ出張している。また『教会編』『産業編』を執筆した岡太郎も五月十二日「市民読本校閲の爲」に教育課へ出張している。このほか昭和四年十二月二十三日には教育課視学が、完成した『市民読本』の贈呈に市史編纂係を来訪している。過去の先人たちの「横浜魂」を必要とする『市民読本』編纂者にとって、横浜市史編纂の試みは渡りに船だったのかもしれない。

吉田町青年団事業との関連

吉田町青年団事業として吉田町々史編輯発起に付午後三時より加

山、岡、兩人帯同にて出席す町内古老数人及団幹部等十数名の座談的史話ありて頗る有益なる資料を得たり 加山、岡交々文獻記録に依り史実諮問に応じたり(昭和五年五月四日)

「吉田町町史」編纂は、御大典記念事業の一環として、「郷土愛を培ふ」ことを目的に開始された事業であったが(『吉田町・柳町青年団団報』第十一号 一九二八年八月一日)、この試みに加山道之助、岡太郎の両氏が双方向的な関わり方をしてい

るのは非常に興味深い。また吉田町青年団は、「郷土開発進歩の歴史を知り郷土愛の観念を深め、その発展に資す」(前掲団報第十六号)ことを目的として、昭和五年九月十六日から五日間、吉田町郷土資料展覧会を開催したが、加山は資料の貸出に際していることが確認できる(昭和五年九月九日)。青年団の修養事業に市史編纂係は一役買っていたのである。

「経済復興」のための「市民」育成の方針を市史編纂担当者が深く理解し、同調していたわけではないだろう。しかし市当局にとって、市史編纂事業は、「市民」を育成する上で少なからず行政的価値を含んだものとして認識されていただろう。市史編纂事業が震災による中断を挟みながらも、十三年間という長期にわたって継続された背景には、そうした事情も関係しているのではないかと考えられる。

(松本洋幸)

高島嘉右衛門と横浜町学校

高島易断で有名な高島嘉右衛門（一八三二—一九一四、号は吞象）

は、明治期に横浜で活躍した実業家の一人である。神奈川県から横浜までの海面埋立工事に携わり、彼の名を冠した高島町（横浜市西区）が誕生したことは、よく知られている。

嘉右衛門の伝記の一つ『商略奇才高島嘉右衛門』（福原律太郎著、大正二年刊）によると、嘉右衛門は天保三年（一八三二）十一月、江戸の三十間堀町（現東京都中央区銀座）に生まれた。父葉師寺嘉兵衛は材木商兼建築請負業を営んでいたという。嘉永三年（一八五〇）父の死去により嘉兵衛を名乗る。安政六年（一八五九）鍋嶋藩の特産品である陶器を外国人に売り込む店を、横浜の本町通に開いた。鍋嶋藩の資金により開店したため、肥前屋と称したという。

万延元年（一八六〇）金貨密売の罪で捕らえられ、慶応元年（一八六五）に出獄するまで、約五年を獄中で過ごした。入獄中に易の坤本一冊を手にしたことが、易を学ぶ契機となり、後に高島易断として結実したという。出獄後、心機一転高島嘉右衛門と名乗り、横浜に出て材木商兼建築請負業を再開した。イギリス公使館や燈台寮の建設などに携わったという。また下水設備の整備やガス灯設置など、横浜の町づくりの基礎となる事業を行った。

多くの土木事業を手がける一方で、嘉右衛門が私財を投じ、手がけた事業の一つに学校の創設がある。横浜

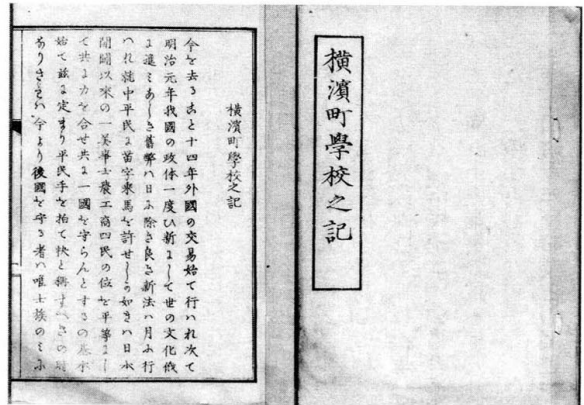
町学校（藍謝堂、高島学校）の開設である。

横浜町学校の開校時期については、前述の『商略奇才高島嘉右衛門』および嘉右衛門の自叙伝である『高島翁言行録』（東京堂、明治四一年刊）には、明治三年（一八七〇）となっている。しかし

『日本教育史資料』（文部省編）によれば、明治四年（一八七二）七月嘉右衛門は、神奈川県庁宛に学校設立に関する願書、「神奈川県横浜高島嘉右衛門私設学校・学校設立ニ付建白願書」を提出していることがわかる。また後年の明治二二年（一八八八）十月、横浜町会所（現横浜市開港記念会館）で開催された神奈川県教育会第二回総集会において、嘉右衛門は「信正の教育」と題する講演を行い、そのなかで、明治四年に横浜町学校を開校したと述べている。（『明治二十一年十月十四日高島嘉右衛門氏横浜町会所ニ於テ教育演説』神奈川県教育会事務所刊）。横浜町学校は、明治四年に開校したと考えられよう。前述の嘉右衛門が神奈川県庁宛に提出した願書には、次のように開校の目的が記されている。

「六七歳以上童男女、貧富トモ容易ニ学校ニ入ルコトヲ得セシメ、彼我ノ学則ヲ用捨シ、以テ人材生養ノ門ヲ開カバ、蓋シ必ラズ開化ノ捷徑ニ庶希セン」

神奈川県は「以自費取建申度段、奇特ニ付、願之通被聞届候」と学校

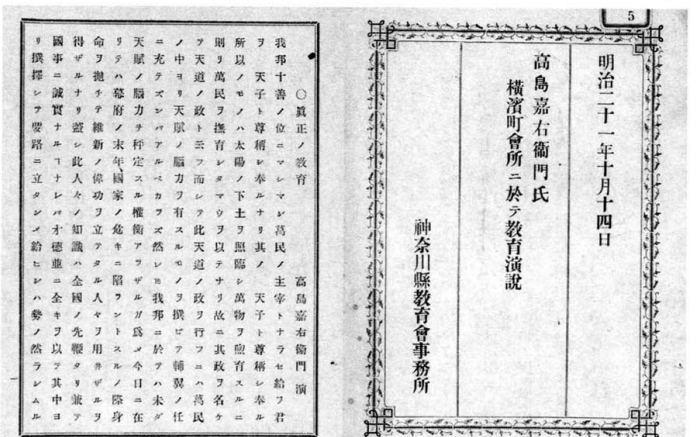


「横浜町学校之記」〔明治4年刊〕

開設を認めた。

『横浜町学校之記』によれば、その年の十一月、横浜町学校は開校した。伊勢山下（横浜市西区宮崎町）の第一校舎と、入船町の第二校舎が開校したともいわれるが、入船町の第二校舎については不明点が多い。写真にあるように、伊勢山下に建設された横浜学校は、洋風木造の二階建てであった。

嘉右衛門は、横浜学校の開校にあたり刊行したのが『横浜町学校之記』であった。入学案内のための学校設立趣意書および学校規則一覧ともいうべきものである。縦19cm×横12.5cmの和装本で、6丁よりなる。教授規則には次のようである。



「明治二十一年十月十四日高島嘉右衛門氏横浜町会所ニ於テ教育演説」〔明治21年刊〕

「一教授ハ四科に分つこと左の如し

第一英語学并に数学

第二英語講学

第三訳書講学

第四手習

右第一科ハ外国教師の職にて以下三科ハ日本教師の職なり

一教授料として毎月初に金を納る事其割合左の如し

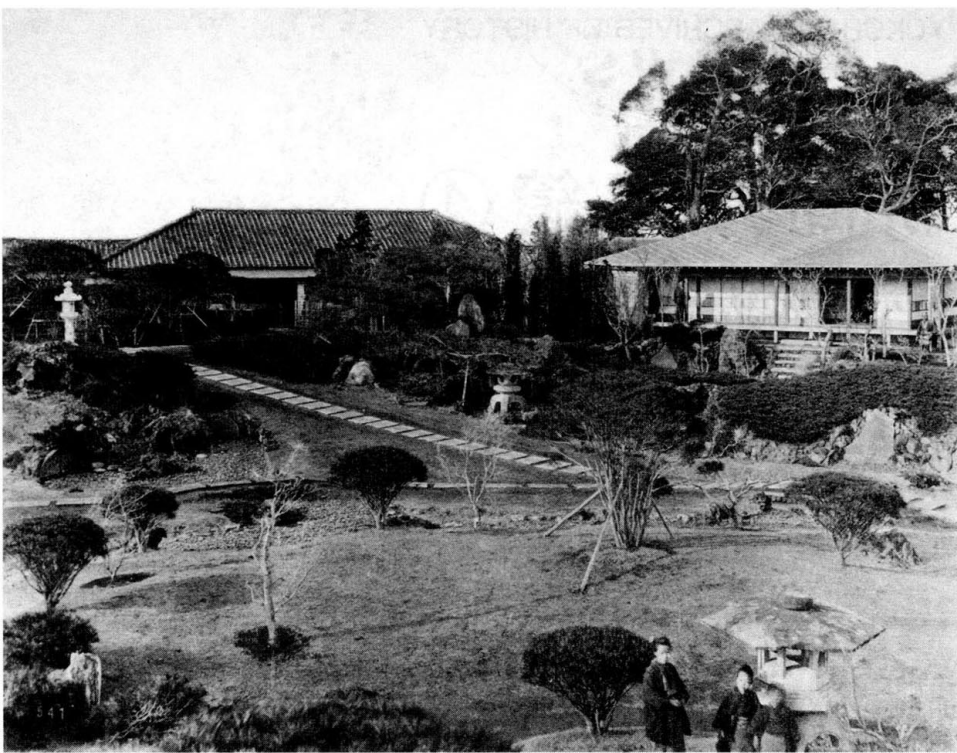
第一科第二科を兼る者ハ一月月金三兩

第二科第三科を兼る者ハ同金二兩

第四と第三科の二等をかねる者ハ同金二分

第四科のみの者ハ同金一分

一右の如く受教科の割合を定めと



高島嘉右衛門邸の庭園

も貧寒極りて衣食にも差支る程の者ハ私に塾監局に来て其次第を訴ふへし、社中相談の上規則外の処置もあるへし(以下略) 第一科の英語は、アメリカ人宣教師バラが教え、福沢諭吉の門弟も教師に加わり、その教育水準は高かったという。入社規則に「学校ハ専ら市民のために設けしものなれとも洋学に志篤き者ハ其身分を問ハす遠

方の人にて入学を許す」とあるように、広く入学者を募集した。また教授料の項にあるように、減免処置も行われたらしく、一時は七百人以上の学生が在籍したという。

明治六年六月には登槐舎と称する小学校を開校した。しかし同年十一月「藍謝堂経費ノ支え難キヲ以テ県庁へ買上ケ」(『神奈川県史料』第五卷)されることとなった。『横浜毎日新聞』十一月二二日号には、横浜町学校が修文館と合併し、市中共立修文館と改称されることとなったという記事がある。市立共立修文館は、のちに神奈川県師範学校となった。伊勢山下の校舎は、修文館との合併後の明治七年一月焼失し、再建されることはなかった。わずか数年しか存在しなかった横浜町学校については、残された資料も少ないが、ここで紹介する横浜町学校の写真も、貴重な写真の一枚である。

嘉右衛門が私財三万円を投じて開設した横浜学校は、開校わずか二年で神奈川県に譲渡された。しかし明治政府により小中学校及び大学の設置等を定めた学制が施行されたのは明治五年八月であり、その約一年前に、一実業家により欧米の近代学校教育制度を取り入れた学校が、ここ横浜で開校された意義は大きい。

明治九年(一八七六)、嘉右衛門は実業界から身を引き、山荘の建設に力を注いだ。神奈川台上の大綱山荘である。ここで易学を深め、その成果は『易占大意』(明治一八年刊)・

『高島易断』(明治九年刊)等にみるこ

とができる。明治十六年(一八八三)、

ようやく大綱山荘は完成した。眼下に自ら携わった京浜鉄道の埋立地を見下ろし、

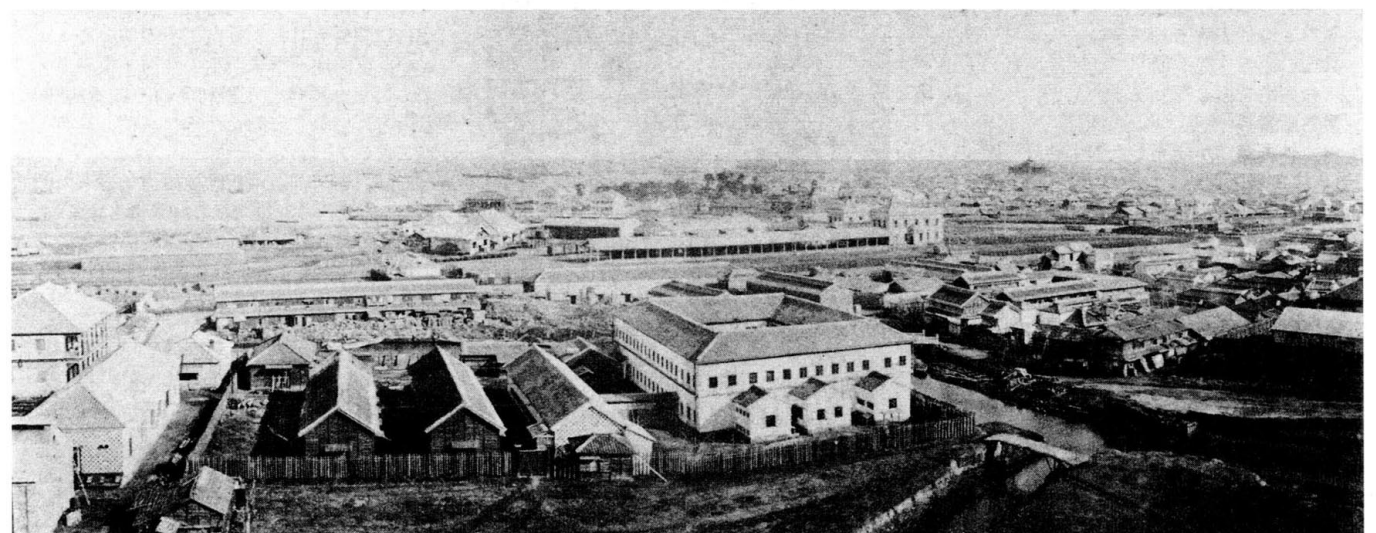
遠く三浦半島を望む広大な庭園には、洋館が移築され、孔子廟が建てられ、数百本の木々が植えられていたという。上の写真は、嘉右衛門の大綱山荘の様子を伝える珍しい写真である。

明治二四年(一八九一)、嘉右衛門は実業界へ復帰し、北海道炭坑鉄道会社社長・東京市街鉄道会社社長などを歴任した。

大正三年十月十六日死去。『横浜貿易新報』大正三年一月一七日・一八日号には、「吾象翁多岐多様の生涯」と題して、二回にわたり追悼記事を載せている。

葬儀は横浜市神奈川区本覚寺で行われた。享年八三歳であった。

(石崎康子)



横浜町学校全景、後ろの長い屋根は横浜駅(現桜木町駅)のプラットホーム

新聞万華鏡④

幕末・明治初年の新聞販売店



万国新聞紙初集

そのためもあって、三月下旬に発行された第三集には、横浜の駒形町伊勢屋勝郎、弁天通五丁目師岡屋伊兵衛、太田町二丁目升屋常吉、江戸の和泉橋藤堂候前大倉屋喜三郎、芝明神前岡田屋嘉七、函館のデュースなどが発行書店として加わっています。横浜だけでなく、江戸や函館でも販売されるようになったことがわかります。その後も発行書店の変更はありますが、桐生、京都、大阪、兵庫、長崎でも販売されていました。

さらに、明治三年二月八日（一八七一年一月二八日）に横浜活版社から日本で初めて発行された日本語の日報『横浜毎日新聞』の創刊号には、この新聞を毎日購入してくれる読者へは活版社から直接配達し、遠方の購入者へは、その最寄の取次所から届ける旨が書かれています。具体的には、明治四年四月二〇日発行の一一一号に販売店がのっていますが、横浜以外に東京、大阪、神戸、長崎と広い範囲にわたって取り扱われていたことがわかります。

東京は、「十軒店書林鈴木喜右衛門」。大阪は、「大手筋折屋町活版社・内淡路町松屋町東へ入日野屋良助・長崎屋宗三郎」。神戸は、「松屋町多田屋善九郎」。長崎は、「新町新街私塾内活版製造所、築町川岸丸屋利右衛門、広馬場弦屋利右衛門、引地町書林塩屋常次郎、今下町小野国太郎」。横浜は、「本町一丁目岸田銀次（吟香）、馬車道高砂町薬店出島松造、弁天通三丁目杉村屋貞七、弁天通五丁目写真師下岡蓮杖」といった販売店が名を連ねています。

販売店には、書店（書林）のほか、この新聞が鉛活字を用いた活版印刷を取り入れていた関係か、大阪の活版印刷所や長崎の活版製造所も見られます。横浜では、薬店出島松造、写真師下岡蓮杖などが兼業で新聞販売をしていました。

兼業ではなく、主として新聞を扱う専売店が登場するのは、もう少し後のことでした。（上田由美）

幕末から明治初期にかけて発行された新聞は、主に絵草紙屋や書店で販売されていました。また、当時の書店は新聞の販売だけでなく、印刷も行なっていました。洋紙に活版印刷をした『横浜毎日新聞』などの近代的な新聞が発行されてからもしばらくはそうした販売形態が続いていたと言います。

横浜で発行された『万国新聞紙』は、慶応三年（一八六七）正月中旬に英国領事館付英国聖公会牧師ペイリーが創刊したもので、木版の和綴本です。二月中旬に発行された第二集の発行書店は、「横浜本町通八三番ハルトリー（ハートリー）、程ヶ谷天野屋幸太郎、横浜太田町三丁目大黒屋茂兵衛」となっています。初期には外国人居留地や横浜の市街地、横浜近郊の宿場町で売られていたことがわかります。そして、販売店を増やすために、新聞紙の売り捌きを希望する人は、申し出てほしいと記されています。

さらに、明治三年二月八日（一八七一年一月二八日）に横浜活版社から日本で初めて発行された日本語の日報『横浜毎日新聞』の創刊号には、この新聞を毎日購入してくれる読者へは活版社から直接配達し、遠方の購入者へは、その最寄の取次所から届ける旨が書かれています。具体的には、明治四年四月二〇日発行の一一一号に販売店がのっていますが、横浜以外に東京、大阪、神戸、長崎と広い範囲にわたって取り扱われていたことがわかります。

資料館だより

▼展示

- (1) 「追憶の横浜—絵葉書に見る100年前の人びとと風景」 1/31(水)～4/22(日)
- (2) 「明治のハイカラ写真館—日下部金兵衛とその世界」(仮称) 4/25(水)～7/29(日)

横浜では幕末から日本の風景・風俗を写真に撮り、外国人に販売することが行われていました。撮影・彩色技術とも明治中期に発展の頂点を迎えます。全盛期の「横浜写真」を代表する写真家の一人、日下部金兵衛の人と作品を通して、明治時代の人びとの生活を振り返ります。

▼寄贈資料

- (1) 外国商館が発売した懐中時計 2点 (保土ヶ谷区西谷 江口茂氏)
- (2) 日下部金兵衛関係資料 105点 (芦屋市西芦屋町 フリーダ・サンジオ氏)
- (3) セントジョセフ・カレッジ卒業アルバム「前進 (Forward)」 48点 (中区山手町 セントジョセフ・インターナショナル・スクール・アルムナイ・アソシエーション会長 セシル・パークレー氏)

▼旧館が横浜市指定文化財に

当館の旧館（旧横浜英国総領事館）がこのほど、横浜市指定文化財に指定されました。関東大震災後の昭和6年（1931）に再建されたもので、英国で18世紀から19世紀



▲一般公開された領事室

にかけて流行した古典主義的な建築様式を取り入れ、昭和47年まで、総領事館としての機能を果たしていました。

これを機に、昨年12月7日から27日まで、普段は公開していない領事室（現在は記念室）を一般公開しました。

▼新複製資料のご案内

企画展「追憶の横浜—絵葉書に見る100年前の人びとと風景」に合わせて、絵葉書

20種を作成しました。展示されるものの中から厳選したもので、1枚100円、5枚で400円（いずれも本体価格）です。3枚以上お買上げの方に、オリジナル封筒をおつけします。展示開催と同時に1階受付で販売いたします。

▼共催講座「幕末明治の江戸・東海道・よこはま」が盛会に開催

昨年10月14日から11月11日までの毎週土曜日に開催された、神奈川宿遊学セミナーとの共催講座「幕末明治の江戸・東海道・よこはま」には、定員80名のところ約200名の方に応募していただき、誠にありがとうございました。

4回目の「神奈川宿歴史の道—幕末の領事館などを歩く—」では、好天にも恵まれ、受講者の皆さんは、講師の説明に熱心に耳を傾けていました。盛会に開催できたこと、重ねて御礼申し上げます。

休館日等のお知らせ

月曜日（2月12日は開館）および2月13日(火)は休館させていただきます。

なお、閲覧室は、上記のほか、1月31日(水)、2月27日(火)～3月2日(金)も資料整理のため休室させていただきます。